

[B年] 聖霊降臨節第22主日(2026年10月18日)**【旧約聖書日課】 イザヤ書 25章1～9節**

¹ 主よ、あなたはわたしの神

わたしはあなたをあがめ

御名に感謝をささげます。

あなたは驚くべき計画を成就された

遠い昔からの揺るぎない真実をもって。

² あなたは都を石塚とし

城壁のある町を瓦礫の山とし

異邦人の館を都から取り去られた。

永久に都が建て直されることはないであろう。

³ それゆえ、強い民もあなたを敬い

暴虐な国々の都でも人々はあなたを恐れる。

⁴ まことに、あなたは弱者の砦

苦難に遭う貧しい者の砦

豪雨を逃れる避け所

暑さを避ける陰となられる。

暴虐な者の勢いは壁をたたき豪雨

⁵ 乾ききった地の暑さのようだ。

あなたは雲の陰が暑さを和らげるように

異邦人の騒ぎを鎮め

暴虐な者たちの歌声を低くされる。

⁶ 万軍の主はこの山で祝宴を開き

すべての民に良い肉と古い酒を供される。

それは脂肪に富む良い肉とえり抜きの酒。

⁷ 主はこの山で

すべての民の顔を包んでいた布と

すべての国を覆っていた布を滅ぼし

⁸ 死を永久に滅ぼしてください。

主なる神は、すべての顔から涙をぬぐい

御自分の民の恥を

地上からぬぐい去ってください。

これは主が語られたことである。

⁹ その日には、人は言う。

見よ、この方こそわたしたちの神。

わたしたちは待ち望んでいた。

この方がわたしたちを救ってください。

この方こそわたしたちが待ち望んでいた主。

その救いを祝って喜び躍ろう。

【使徒書日課】 ヨハネの黙示録 7章2～4節、9～12節

² わたしはまた、もう一人の天使が生ける神の刻印を持って、太陽の出る方角から上って来るのを見た。この天使は、大地と海とを損なうことを許されている四人の天使に、大声で呼びかけて、³ こう言った。「我々が、神の僕たちの額に刻印を押してしまうまでは、大

地も海も木も損なってはならない。」⁴ わたしは、刻印を押された人々の数を聞いた。それは十四万四千人で、イスラエルの子らの全部族の中から、刻印を押されていた。

⁹ この後、わたしが見ていると、見よ、あらゆる国民、種族、民族、言葉の違う民の中から集まった、だれにも数えきれないほどの大群衆が、白い衣を身に着け、手になつめやしの枝を持ち、玉座の前と小羊の前に立って、¹⁰ 大声でこう叫んだ。

「救いは、玉座に座っておられるわたしたちの神と、小羊とのものである。」

¹¹ また、天使たちは皆、玉座、長老たち、そして四つの生き物を囲んで立っていたが、玉座の前にひれ伏し、神を礼拝して、¹² こう言った。

「アーメン。」

賛美、栄光、知恵、感謝、

誉れ、力、威力が、

世々限りなくわたしたちの神にありますように、

アーメン。」

【福音書日課】 マタイによる福音書 5章1～12節

¹ イエスはこの群衆を見て、山に登られた。腰を下ろされると、弟子たちが近くに寄って来た。² そこで、イエスは口を開き、教えられた。

³ 「心の貧しい人々は、幸いである、

天の国はその人たちのものである。

⁴ 悲しむ人々は、幸いである、

その人たちは慰められる。

⁵ 柔和な人々は、幸いである、

その人たちは地を受け継ぐ。

⁶ 義に飢え渇く人々は、幸いである、

その人たちは満たされる。

⁷ 憐れみ深い人々は、幸いである、

その人たちは憐れみを受ける。

⁸ 心の清い人々は、幸いである、

その人たちは神を見る。

⁹ 平和を実現する人々は、幸いである、

その人たちは神の子と呼ばれる。

¹⁰ 義のために迫害される人々は、幸いである、

天の国はその人たちのものである。

¹¹ わたしのためにののしられ、迫害され、身に覚えのないことであらゆる悪口を浴びせられるとき、あなたがたは幸いである。¹² 喜びなさい。大いに喜びなさい。天には大きな報いがある。あなたがたより前の預言者たちも、同じように迫害されたのである。」

「聖書協会共同訳」（2018 年版）読み比べ

イザヤ書25章1～9節

- ¹ 主よ、あなたは私の神
私はあなたを崇め
あなたの名をほめたたえよう。
あなたははるか昔の驚くべき計画を
忠実に、誠実に成し遂げられた。
- ² あなたは都を瓦礫の山とし
城壁に囲まれた町を廃墟に変えられた。
他国人の城郭は都から取り去られ
とこしえに築き直されることはない。
- ³ それゆえ、強い民はあなたを敬い
横暴な国々の町もあなたを畏れる。
- ⁴ まさに、あなたは弱い者の砦
苦難の中にある貧しい者の砦
豪雨を逃れる逃れ場
暑さを避ける日陰となられる。
横暴な者たちの勢いは壁を叩く豪雨
- ⁵ 乾いた土地の暑さのようだ。
あなたは、雲の陰が暑さを和らげるように
他国人の騒ぎを鎮め
横暴な者たちの歌声は弱められる。
- ⁶ 万軍の主はこの山で
すべての民のために祝宴を催される。
それは脂の乗った肉の祝宴
熟成したぶどう酒の祝宴。
髓の多い脂身と
よく濾されて熟成したぶどう酒。
- ⁷ 主はこの山で
すべての民の顔を覆うペールと
すべての国民にかぶらせている覆いを破り
- ⁸ 死を永遠に呑み込んでくださる。
主なる神はすべての顔から涙を拭い
その民の恥をすべての地から消し去ってくださる。
確かに、主は語られた。
- ⁹ その日には、人は言う。
見よ、この方こそ私たちの神。
私たちはこの方を待ち望んでいた。
この方は私たちを救ってくださる。
この方こそ私たちが待ち望んでいた主。
その救いに喜び躍ろう。

ヨハネの黙示録 7章2～4節、9～12節

- ² また私は、別の天使が生ける神の刻印を携え、日の出る方から上って来るのを見た。その天使は、大地と海とを損なうことを許されている四人の天使に向かって

大声で叫んで、³言った。「私たちが、神の僕の額に刻印を押すまでは、大地も海も木々も損なってはならない。」⁴私は、刻印を押された人々の数を聞いた。それはイスラエルの子らの全部族の中から刻印を押された人々であり、十四万四千人であった。

⁹この後、私は数えきれないほどの大群衆を見た。彼らは、あらゆる国民、部族、民族、言葉の違う民から成り、白い衣を身にまとい、なつめやしの枝を手に持って、玉座と小羊の前に立っていた。¹⁰彼らは声高らかに言った。

「救いは、玉座におられる私たちの神と小羊にある。」

¹¹また、天使たちは皆、玉座と長老たちと四つの生き物を囲んで立っていたが、玉座の前にひれ伏し、神を礼拝して、¹²こう言った。

「アーメン。賛美、栄光、知恵
感謝、誉れ、力、権威が
世々かぎりなく私の神にありますように
アーメン。」

マタイによる福音書5章1～12節

- ¹ イエスはこの群衆を見て、山に登られた。腰を下ろされると、弟子たちが御もとに來た。²そこで、イエスは口を開き、彼らに教えられた。
- ³ 「心の貧しい人々は、幸いである、
天の国はその人たちのものである。
- ⁴ 悲しむ人々は、幸いである、
その人たちは慰められる。
- ⁵ へりくだった人々は、幸いである、
その人たちは地を受け継ぐ。
- ⁶ 義に飢え渴く人々は、幸いである、
その人たちは満たされる。
- ⁷ 憐れみ深い人々は、幸いである、
その人たちは憐れみを受ける。
- ⁸ 心の清い人々は、幸いである、
その人たちは神を見る。
- ⁹ 平和を造る人々は、幸いである、
その人たちは神の子と呼ばれる。
- ¹⁰ 義のために迫害された人々は、幸いである、
天の国はその人たちのものである。
- ¹¹ 私のために、人々があなたがたを罵り、迫害し、ありもしないことで悪口を浴びせるとき、あなたがたは幸いである。¹²喜びなさい。大いに喜びなさい。天には大きな報いがある。あなたがたより前の預言者たちも、同じように迫害されたのである。」

黙想のためのノート**次主日の教会暦と聖書日課**

・10月18日「聖霊降臨節第22主日」の日課主題は「天国に市民権をもつ者」。

・旧約日課は、「イザヤ書」から、諸国民を裁く神である主の臨在されるところを告げる預言箇所。使徒書日課は「ヨハネの黙示録」から、天上で回復されたイスラエルの民と諸国民からなる大群衆の礼拝を描く箇所。福音書日課は、「マタイによる福音書」から、山上の説教の冒頭に置かれた八福の教えの箇所。

旧約日課(イザヤ25章より)

・「イザヤ書」は、ユダヤ教正典(ヘブライ語聖書)の区分で「後の預言者」の第一に置かれた預言文書。標題(1:1)によれば、前8世紀後半にユダ王国(南王国)の四代の王に仕えた宮廷預言者イザヤの預言句集と活動録の集成として編纂されているが、通説では40章以下は前6世紀バビロン捕囚期以降の時代にユダヤ帰還・エルサレム再建事業に携わった預言者集団によって告げられた預言が付加されたものと解されている。彼ら前6世紀の預言者集団は、歴史的預言者イザヤの伝統継承者を自認し、かつて王国書記官によって編纂された「預言者イザヤの預言の書」を原本に正典「イザヤ書」を編み出したものと推察される。この40章以下は、一般に「第二イザヤ」と呼ばれ、前半39章までと区別して扱われる。

・日課箇所は、歴史的イザヤに帰される本書前半部に含まれるが、現代の聖書学者の中には後代に付加された預言句集(24～27章)の一部とみなし、この句集を「イザヤの黙示録」などと称す者もある。そうだとすると、この預言句集が前8世紀の歴史的預言者イザヤの時代の文脈に置かれて本書が編纂されていることは揺るがず、ここで告げられる内容を後代の歴史的背景のもとで解釈しなければならないということにはならない。

・この預言句集(24～27章)は、前8世紀中葉に登場したティグラト・ピレセル王の下で軍事侵攻を拡大し始めたアッシリアによって破滅を迎えた諸国に対する裁きが告げられ、そのような時代を生き延びて残されたユダ王国が回復されていく希望が告げられている。同様の世界史的な動きは、前7世紀末から前6世紀前半にかけてネブカドネツアル王の下で支配を拡大したバビロニアの侵攻によっても起こっており、その際にユダ王国は、かつての教訓を生かすことができずにエルサレム王権および神殿の喪失という悲劇を甘んじて受けることになるが、バビロンに幽閉されていた捕囚王ヨヤキンの系譜がペルシア支配時代の到来と共に希望の拠り所となってエルサレム神殿の再建とユダヤ＝イスラエル共同体の再興を為すことになった。

・前8世紀のユダ王国は、二度、滅亡の危機に瀕した。最初は、アッシリアに対抗しようとしたイスラエル王国(北王国)とアラム王国の同盟に参画することをアハズ王が拒んだ際で、本書7章が伝えている。次

の危機は、北王国滅亡後、アッシリアで王位継承の混乱が生じた際にエジプトが反アッシリア同盟を呼びかけてユダ王国ヒゼキヤ王がそれに応じようとした際で、センナケリブ王の下でエルサレム包囲戦が続けられたが、最終的に包囲が解かれて滅亡を回避したことが、本書36～39章(＝列王記下18～20章)に描かれている。いずれの記述も、王が預言者イザヤに助けを求め、預言者の告げる預言に従うことで危機を回避することができた出来事として描かれている。いずれも、預言者を通して「主なる神」に従ったという構図が明確に示されており、本書の政治神学となっている。

使徒書日課(黙示録7章より)

・「ヨハネの黙示録」は、新約正典の最後に置かれた黙示(啓示)文書。「僕ヨハネがアジア州の七つの教会に宛てた書簡」という体裁の文書を核として、これを囲い込む枠組みを付加した構成に編纂されている。「僕ヨハネ」(1:1)は、「ヨハネ福音書」や「ヨハネの手紙一、二、三」に充てられている「使徒ヨハネ」あるいは「長老ヨハネ」と同一視される場合もあるが、古い時代から「福音書」や「手紙」とは区別して扱われてきており、通常、別の人物として解されている。著者や内容の「使徒性」に疑義が向けられたこともあり、新約正典の一つに数えられるようになったのは遅く、西方教会で4世紀末、東方正教会では10世紀になってからである。東方正教会では、現在でも礼拝での朗読に用いない習慣が残されている。

・本書は、「僕ヨハネ」が幽閉先のパトモス島で迎えた主の日の祈りの中で見た幻として編纂されており、1～3章は七つの教会それぞれに宛てられるべき手紙として、4章以下は「ヨハネ」が天上に引き上げられて見せられた天上界で繰り広げられる礼拝や救済の物語として、展開されている。特に4章以下の異世界的表象を用いた描写が、前6世紀以降のペルシア宗教の影響下で広がりを見せていた「黙示文学」のそれと解されてきた。ペルシア宗教(≡ゾロアスター教)は、天上界で善悪二神の下で繰り広げられる抗争が地上界にも反映されて善と悪の歴史が展開しているという世界観があり、これに基づき、通常は地上界から閉じられている天上界の秘密が限られた存在に「啓示(黙示)」され明かされたことを物語る「黙示文学」という形式が発展した。本書で「黙示」(1:1)と訳されているギリシア語「アポカリュプトス」は、本書以外の新約文書では「啓示」等と訳されている。

・日課箇所は、「僕ヨハネ」が天上で目撃し、問うことを許された礼拝の様子が描かれている。4章でも礼拝の様子が描かれているが、そこでは、神と御子の周囲に天使たちと長老たちだけが集って礼拝している。しかし、日課箇所では、そこに「白い衣を着た大群衆」が加わっている。文脈から、この「大群衆」は、日課箇所前段で描かれる「回復されたイスラエル十二部族」の十四万四千人を指すとも解し得る。

福音書日課(マタイ 5 章より)

・日課箇所は、「山上の説教」と呼ばれる一連の教えがまとめられた章句(マタイ 5~7 章)の冒頭部分で、「八福の教え」などと呼ばれる教えが提示されている。

・「山上の説教」は、「マタイ福音書」が独自で設定している場面で、四人の漁師を弟子として従わせて活動を始められた主イエスがなされた最初の教えのまとめという構成になっている。ただし、個々の教えについては、他の福音書が並行して伝えている例が少なくない。「マタイ」だけが独自に伝えているのは、「律法」についての基本的な姿勢を示す章句(5:17~30)、「施し、祈り、断食」についての姿勢を示す章句(6:1~18 のうち「主の祈り」に関する教えを除く部分)であり、「ユダヤ教」における律法理解や宗教実践の習慣を如何に継承するかということに独自の関心と強調点があると見ることができる。

・日課箇所は、「山上の説教」の場面導入句(1~2 節)と、最初の教えである「八福の教え」(3~12 節)に分けられる。

・「山上の説教」の場面設定では、冒頭で「群衆」の存在を示しているにもかかわらず、山の上で主イエスが教えられた相手は近くに因ってきた「弟子たち」だけに限定されている。すなわち、この一連の教えは、「群衆」を対象にして語られた一般教説ではなく、「群衆」を背後に見据えて「弟子たち」に向けられた教えとして提示されているもの、と解することができる。

・「八福の教え」は、3~10 節の各節が同じ韻文の修辞表現で繰り返されていることから、そう呼ばれてきたが、11 節の平叙文で記されている類似内容の句を加えて「九福の教え」と数える者もある。ただし、11 節は 10 節の内容を敷衍した句であり、12 節と合わせて「八福の教え」に続く勧告句と解するのが自然。

・「八福の教え」に相当する教えを、「ルカ」も伝えているが(ルカ 6:20~23)、取り上げられている事項は三つに限定され(3 節、6 節、11~12 節に相当)、代わりに、逆説的な「不幸」を告げる言葉が続いて置かれている(ルカ 6:24~26)。また、共通する事項のうち二つ(3 節、6 節に相当)についても、大きく意味を異にする表現になっている。

・3 節「心の貧しい人々は…」を、並行する「ルカ」は「貧しい人々は…」(ルカ 6:20)としている。「マタイ」の「心の」は、ギリシア語「プネウマティ」で、通常は「霊について」と訳される語。この語を「心」と訳す例は、マタイ 26:41 にも見られる。また、主イエスの十字架上の死の場面(同 27:50)では、「息」と訳されている「霊」と訳される場合はほとんど、「神の霊」「聖霊」または「汚れた霊」などの表現となる。「心の貧しい」は、精神性の低さではなく、肉体を持つ者としての生命力の脆弱性などを意味していると考えられる。

来週の誕生日 (10 月 18 日~24 日)**主日礼拝の讃美歌から**

- ・21-379「この世にあかし立てて」は、19 世紀を代表する讃美歌作家で英国教会主教にもなった W.W. ハウ。作曲は英国を代表する作曲家ヴォーン・ウィリアムズ。英語圏では聖徒の日 (All Saints' Day) にもっともよく歌われる讃美歌の一つ。
- ・21-385「花彩る春を」は、『讃美歌 21』編纂に当たって公募採用された日本人作詞作曲の讃美歌。作詞の上島美枝は、松山教会のオルガニストで、当初父親が作曲した曲との組み合わせで応募した。曲は、県町教会で受洗して後に日本キリスト教会に移った合唱指導者・作曲家の高浪晋一が、この歌詞に合わせて作曲。
- ・21-579「主を仰ぎ見れば」は、1931 年版『讃美歌』編纂に先立って行われた讃美歌公募に際して、旧日本基督教会牧師・宮川勇が応募した作品の一つで、黙示録 21~22 章に着想を得てまとめた詩が原案とされる。曲も、同じ公募に応募した中学校音楽教師・土屋初枝の作曲した作品。
- ・21-111「信じて仰ぎみる」(=I488)は、19 世紀米国の福音唱歌の一つ。多くの福音唱歌を作詞した S.ベネットが作詞し、友人の音楽家 J.ウェブスターが作曲。ウェブスターが編纂した日曜学校讃美歌集(1868 年)で知られるようになった。

21-379「この世にあかし立てて」***For All the Saints, who from their Labours Rest***

1. For all the saints, who from their labors rest, / who thee by faith before the world confessed, / thy Name, O Jesus, be forever blessed. / Alleluia, Alleluia!
2. Thou wast their rock, their fortress and their might; / thou, Lord, their Captain in the well-fought fight; / thou, in the darkness drear, the one true Light. / Alleluia, Alleluia!
3. For the apostles' glorious company, / who bearing forth the cross o'er land and sea, / shook all the mighty world, we sing to Thee: / Alleluia, Alleluia!
4. O blest communion, fellowship divine! / We feebly struggle, they in glory shine / yet all are one in thee, for all are thine. / Alleluia, Alleluia!
5. And when the strife is fierce, the warfare long, / steals on the ear the distant triumph song, / and hearts are brave, again, and arms are strong. / Alleluia, Alleluia!
6. The golden evening brightens in the west; / soon, soon to faithful warriors cometh rest; / sweet is the calm of paradise the blest. / Alleluia, Alleluia!
7. But lo! there breaks a yet more glorious day; / the saints triumphant rise in bright array; / the King of glory passes on his way. / Alleluia, Alleluia!
8. From earth's wide bounds, from ocean's farthest coast, / through gates of pearl streams in the countless host, / singing to Father, Son, and Holy Ghost: / Alleluia, Alleluia!

21-111「信じて仰ぎみる」***There's land that is fairer than day***

1. There's a land that is fairer than day, / And by faith we can see it afar, / For the Father waits over the way / To prepare us a dwelling place there.
- Refrain: In the sweet by and by, / We shall meet on that beautiful shore; / In the sweet by and by, / We shall meet on that beautiful shore.
2. We shall sing on that beautiful shore / The melodious songs of the blest; / And our spirits shall sorrow no more - / Not a sigh for the blessing of rest. [Refrain]
3. To our bountiful Father above, / We will offer our tribute of praise, / For the glorious gift of His love / And the blessings that hallow our days. [Refrain]